

エミリ・ブロンテの詩における〈死〉の観念の変遷について

後 中 陽 子

〔抄 録〕

エミリ・ブロンテの詩において〈死〉は重要なテーマの一つである。彼女の〈死〉に対する思想は、初期の作品から中期、後期と時を経るにつれ、しだいに深みを増すように思われる。本稿ではおもに、初期の代表作としてH41「詩行」、中期のものとしてH155「自問」、後期のものとしてH177「信仰と失望」、これら3つの詩篇を中心にとりあげ、そこに描かれる〈死〉について考える。卓絶した想像力によって広大な精神世界を有し、哲学的な思索を好むエミリ・ブロンテの、〈死〉の思想とはどのようなものか、彼女の詩における〈死〉に対する考えはどのような軌跡をたどって変貌を遂げていくのか、本稿はこの点についての考察を目的とする。

キーワード 〈死〉、人間、〈生〉、自然界、〈永遠〉

序論

エミリ・ブロンテ (Emily Brontë, 1818-48) はブロンテ三姉妹の中でも、とりわけて強い自我と克己的な魂の持ち主である。彼女は、1842年の短期間ブリュッセルに留学したこと以外は、愛する故郷ハワースの地を生涯ほとんど離れることがなかった。30年の短い生涯を地理的には非常に限られた空間で過ごしながらも、彼女の思索は、空想力という友の助けを借りて、彼女の内面世界を広げ、人間全体の普遍的真理の考察へと大きく飛翔した。ブロンテの孤高の魂の叫びは、彼女の詩の中で如実に語られている。

エミリ・ブロンテの最初の詩が書かれた日付は、ハットフィールド (C.W. Hatfield) 編 *The Complete Poems of Emily Jane Brontë*によれば、1836年7月12日となっている。エミリは17歳の頃から詩を書き始めた。彼女の詩作期間は1836年から1848年のほぼ12年間である。彼女の詩は、個人的な告白ともいえる詩と、妹のアン (Anne Brontë, 1820-49) と共同で創作していたゴンドル物語のために書かれ、架空の人物に託して歌ったゴンドル詩 (Gondal Poems) との二種類に大別できる⁽¹⁾。エミリは1844年2月に、これまで綴ってきた詩をゴンドル詩とその他の詩とに分類して二冊のノートにまとめている⁽²⁾。ハットフィールドがこれら二冊のノートブックに基づいて、エミリの個人的な述懐を綴った詩をノートA、ゴンドル詩をノートBと記号をつけ

て手堅く研究してくれたおかげで、われわれはゴンドル詩篇とその他の詩篇の区別をつけることができる⁽³⁾。

全193篇からなる詩作品の中でも、〈死〉は初期の作品の頃から、エミリ・ブロンテの詩の根幹をなす課題であった。本稿では、彼女の詩における重要なテーマの一つである〈死〉に着目し、彼女の〈死〉に対する観念がどのような変貌を遂げていったのか、その軌跡をたどってみたい。

I. エミリ・ブロンテの初期の詩に見られる〈死〉の観念

まず、初期の作品として数えられるであろうH41 ‘Lines’ 「詩行」をとりあげ、そこに見られる〈死〉の観念について考察する。

1837年12月、エミリ19歳のときに書かれた詩であるH41 「詩行」は、‘I die’ 「わたしは死ぬ」と、語り手が自分が死ぬことを告げる言葉で始まる。これはゴンドル詩に分類される作品で、死んでいこうとする人物は特定できないが、『嵐が丘』(*Wuthering Heights*, 1847) のキャスリン・アーンショウ (Catherine Earnshaw) を想起させるものがあるとされる⁽⁴⁾。物語の人物の言葉に託してはいるが、エミリ自身の思想が窺える重要な詩の一つだといえるだろう。第1連を引用する。

I die; but when the grave shall press
The heart so long endeared to thee,
When earthly cares no more distress
And earthly joys are nought to me,⁽⁵⁾

第1連3・4行目「この世の煩いがもうわたしを悩ますこともなく／この世の歓びもわたしには何ということもなくなる時」という詩行が、現世の憂いや喜びに心捕われることがなくなった状態、つまり「わたし」が死ぬときを表していることは明らかである。この詩の主人公は、いまから死にゆく人である。第1連で、この詩が〈死〉を歌ったものであり、また語り手が‘thee’ 「あなた」に向かって語り手自身との永別に際する心構えを諭している詩であることが示される。

‘earthly cares’ の言葉からは、のちに歌われることとなるH174 ‘To Imagination’ 「想像力によせて」の第1連の一節 ‘When weary with the long day’s care, / And earthly change from pain to pain, / And lost, and ready to despair’⁽⁶⁾ 「長い一日の心労に倦み／苦痛から苦痛に移るこの世の変化に疲れはて／こころも挫けていまにも絶望に沈もうとする時」が想起される。さらに、‘earthly joys’ の言葉からは、やはり後年の作H188 ‘Anticipation’ 「期待」の第5連

を想起することができる。彼女はH188の中で ‘... every phase of earthly joy / Will always fade and always cloy’⁽⁷⁾ 「この世の歓びはあらゆる面が／必ず色褪せ必ず鼻につく」と歌っている。彼女にとって ‘earthly cares’ とは、苦痛から苦痛へと移り変わり定まることのない変化であり、詩人の心を摩耗するものである。そして ‘earthly joys’ は、いつか色褪せ飽きがくるもの、とても信じるに足るものではありえない。

H41の第2連に進む。現世の煩いから解放されるであろう詩の語り手は、この世に残していく「あなた」に向かって次のように語る。

Weep not, but think that I have past
 Before thee o'er a sea of gloom,
 Have anchored safe, and rest at last
 Where tears and mourning cannot come.⁽⁸⁾

語り手の言によれば、死にゆくことは「涙と嘆きのおとずれることのできないところに／無事錨をおろしついに安らぎを得る」ことである。涙と嘆きがおとずれるのはこの現世のみ。死者の国に入れば、それらに悩まされることはなく、安らぎを得ることができる。これがH41の詩における<死>の捉え方である。だから悲しむ必要はないのだと、語り手は聞き手に対して優しく教え諭す。

第3連では、死出の旅路が ‘... storms around and fears before / And no kind light to point the shore’⁽⁹⁾ 「四方には嵐、前途には恐怖／岸辺を指し示すやさしい光もない大海原を」行くことであると歌われる。こうして<死>の世界にたどり着いた語り手は、<生>について、<死>について、次のように述べる。第4連を引用する。

But long or short though life may be
 'Tis nothing to eternity;
 We part below to meet on high
 Where blissful ages never die.⁽¹⁰⁾

語り手は、「長かろうと短かろうと／人生は永遠に比べれば無に等しい」という。この言葉からは、およそ19歳の少女が書いたとは思えないほどの、人生を達観した者の眼差しが窺える。<生>は刹那のことであり、永劫の<時>の流れには比するべくもないのだと、語り手は主張する。そして、人の離別は、とりわけそれが<死>による別れである場合、‘to meet on high’ 「天上で出会うため」にあるのである。天上世界は「祝福にみちた年月が／決して絶えることのない」場所である。ここには死して天上で再会しようという既成のキリスト教的な考えが窺え

る。このように、初期の詩H41 'Lines' 「詩行」において、〈死〉は安らぎであり、天上で再会するためであると解されていた。〈死〉によって人の魂は天上に行き、神の御許で愛する人と再会するという観念は、既成のキリスト教の教えに則ったもので、独創性はない。

この初期の時点では、エミリの〈死〉に対する考えは、大いにキリスト教の影響を受けているといえよう。しかし、それはのちに変化していく。彼女は既成の観念から脱し、さらに広大な〈死〉の世界を自らの思想のうちに構築していくようになる。そこに至るまでには彼女なりの葛藤があったはずである。次に、エミリが〈死〉についてどのような気構えをもっていたか、彼女の中期の対話詩をとりあげ彼女の内的葛藤を考察していく。

Ⅱ. エミリ・ブロンテの中期の詩に見られる〈死〉の観念

1842年2月、シャーロット (Charlotte Brontë, 1816-55) とエミリは外国語を習得するため大陸に渡り、ブリュッセルのエジェ寄宿女学院に留学する。同年11月まで、エミリはそこで9ヶ月間の留学生活を送った⁽¹¹⁾。ジル・ディックス・グナツシア (Jill Dix Ghnassia) は、著書『エミリ・ブロンテ 神への叛逆』(*Metaphysical Rebellion in The Works of Emily Brontë*, 1994)の中で、この短い留学を体験した年はエミリの成長における転換点であると記し、この時期に書かれたフランス語のエッセイ8篇とH153からH155までの詩3篇をエミリの作品の第3期として分類している⁽¹²⁾。

本章においては、第3期の最後の作とされるH155 'Self-Interrogation' 「自問」をとりあげる。この詩を書いた日付は1842年の10月23日から翌1843年の2月6日となっており、ブリュッセルへの出立前に書き出し、帰国後完成させたエミリ24歳のときの作である。これは、エミリの個人的な詩作品をおさめるノートAに含まれる⁽¹³⁾。

1846年に『カラー、エリス、アクトン・ベル詩集』(*Poems by Currer, Ellis, and Acton Bell*)として発行された際につけられた「自問」という題名⁽¹⁴⁾からしても、詩は自我の二つの声が対話している設定となっている。この詩を論じるに当たって、便宜上、対話者Aと対話者Bに分けて論じていきたい。

まず、詩の第1連は次のように始まる。

The evening passes fast away,
'Tis almost time to rest;
What thoughts has left the vanished day?
What feelings in thy breast? ⁽¹⁵⁾

時刻は夕刻、夕暮れと夜とが溶け合う頃、エミリの空想力がもっとも羽根を広げる時間であ

る。詩人の中の、一人の対話者Aは自分自身に「消えさった一日はどんな想いを／どんな感情をおまえの胸に残していったのか」と問いかける。過ぎさった一日を単に ‘the day passed away’ と表現せずに ‘the vanished day’ と表現していることから、一日が無駄に過ぎたことに対して話者が抱えている喪失感がいかに大きいかを感じられる。

第2連は、‘The vanished day?’ と対話者Aのそのままの言葉を受けて、自分自身の中の対話者が答える。これを対話者Bの声とする。‘a sense / Of labour hardly done’ 「ほとんど仕事をやりとげなかったという感じ」 ‘[a sense] Of little, gained with vast expense’ 「莫大な犠牲を払ったのに得たものは少ないという感じ」 ‘A sense of grief alone’ 「ただ悲しみの感じだけ」、対話者Bは一日が無駄に過ぎたことをこれら三つの感覚で答えている。何も為さずに日が過ぎると、時間を無駄にしてしまったと感じるのは一般的な感慨であろう。だが、とりわけストイックな性質であるエミリの胸には、この喪失感は孤独な悲しみとなって重くのしかかる。それは、彼女が<時>の重要さと<生>の限りを認識しているからである。第3連には対話者Bの言葉が続く。

“Time stands before the door of Death,
Upbraiding bitterly;
And Conscience, with exhaustless breath,
Pours black reproach on me: ⁽¹⁶⁾

この連以降、‘Time’ ‘Death’ ‘Conscience’ といった抽象的なものが大文字で書き出され、擬人化されたもののように登場する。以後、訳語に当たっては、そのような大文字で書かれた抽象名詞を括弧付きで記す。第3連1・2行目「<時>は<死>の扉の前に立ち／厳しく責め立てる」とは、この世の真理をついた2行である。‘Time’ <時>は ‘the door of Death’ <死>の扉に向かって流れ続ける。言い換えれば、<生>は<死>にぶつかるまでの<時>の流れであり、その流れの激しさを緩めはしない。<時>の流れは、何かを為そうと願いつつも為せていない詩人の焦る心を、無情といえるほど ‘Upbraiding bitterly’ 「厳しく責め立てている」のである。第3連3・4行目にある、良心が「わたし」に浴びせる ‘black reproach’ 「黒い非難」とは、第2連2・3行目の感覚、自分は「ほとんど仕事をやりとげなかった」「莫大な犠牲を払ったのに得たものは少ない」という自己非難の声であると考えられる。

対話者Bの答えに対して第5連、対話者Aは次のようにふたたび問いかける。

Then art thou glad to seek repose?
Art glad to leave the sea,
And anchor all thy weary woes

In calm Eternity? (17)

1行目の‘repose’とは、すなわち＜死＞の安らぎを意味する。H41においてもそうであったが、詩人にとって＜死＞は現世に疲れた魂の安らぎ、「休息」である。3・4行目に「おまえの疎ましい悲しみのすべてを／静かなく永遠＞に投錨するのか」という問いがあるが、前述のH188の第7連1・2行目にも似たような表現が見られる。H188で詩人は‘There cast my anchor of Desire / Deep in unknown Eternity’⁽¹⁸⁾「未知の＜永遠＞の海深く／わたしの欲望の錨をおろすがよい」と歌うが、＜永遠＞の中に錨を投じるという表現は、彼女の脳裏につねにあった＜死＞を表すイメージであるといえる。＜死＞を求めて満足かという問いに重ねて、第6連では対話者Aの、自分が死んでも誰も泣きはしないし、惜しむことも何もありません、それでも＜生＞の世界に留まりたいのか、という自問が続く。その問いに対して、第7連と第8連で対話者Bが答える。第7連を引用する。

“Alas! The countless links are strong
That bind us to our clay;
The loving spirit lingers long,
And would not pass away—⁽¹⁹⁾

対話者Bは「わたしたちをこの土塊である肉体に結びつける／数知れぬ絆」の強さを嘆く。対話者Bは、自分が死ぬならこの世に残していくことになる‘The loving spirit’「愛する者の魂」に執着を示す。＜生＞の世界に未練があるのである。なぜ未練が残るのか、それは第8連で語られる。

“And rest is sweet, when laurelled fame
Will crown the soldier’s crest;
But a brave heart with a tarnished name
Would rather fight than rest.”⁽²⁰⁾

‘laurel’「月桂樹」は、音楽や医術、予言の神、アポロへの捧げ物としてギリシア人に神聖視された植物である。常緑樹として不滅を表すところから勝利を意味する。ギリシアとローマでは、何らかの分野で名を挙げたものには月桂樹の葉で作られた月桂冠が与えられた⁽²¹⁾。月桂冠は、勝利と栄光のシンボルとして勝者や優秀な者達、そして大詩人の頭上に掲げられた榮譽の証である⁽²²⁾。詩人は、まるで「兵士」のように「勇敢なこころ」をもって、月桂冠を頭上に飾らなため、そして「穢された名」を奪回せんがため、「休息」よりもむしろ「戦い」を望む。

この連に二度見られる ‘rest’ はともに<死>を意味している。それと対極にある ‘fight’ は<生>を意味する。第2連にあったように、何も為し遂げていない自分は、まだ「戦い」を、<生>を望まなければならない。その答えに対話者Aは同意する。第9連で対話者Aは、自身が ‘Hast humbled Falsehood, trampled Fear’ 「虚偽を賤しめ恐怖を踏み躪り」 ‘hast fought for many a year’ 「何年も戦ってきた」こと、いまもなお戦っていることを、現在完了形を用いて自認する。対話者ふたりの心はついに共鳴し、一つの決意を導き出す。第11連を引用する。

Look on the grave where thou must sleep,
Thy last and strongest foe;
’T will be endurance not to weep
If that repose be woe. ⁽²³⁾

詩人は1・2行目で「おまえが眠らなければならない墓／おまえの究極のもっとも強い敵を見よ」と主張する。<死>を見よ、<死>は敵である、という強い叱咤の声は自身に向けられたものでもあり、また人間全体に向けられたものでもある。人は<死>を見つめること、<死>と真向かう勇気と忍耐を必要とする。<生>と<死>を通して ‘a chainless soul / With courage to endure’ ⁽²⁴⁾ (H146) 「耐え忍ぶ勇気のある／縛られることのない魂」を求める詩人は、自問自答の中で人類全体に通ずる一つの普遍的真理を見出す。さらに詩人は、何も為し得ず勇者の証である月桂冠を得ることなく、‘repose’ 「休息」すなわち<死>が悲しみとなるならば、「泣かぬことこそが忍耐」と悟る。第12連は詩の最終連である。

The long fight closing in defeat—
Defeat serenely borne—
Thine eventide may still be sweet,
Thy night a glorious morn. ⁽²⁵⁾

‘The long fight’ 「長い戦い」であった<生>が ‘defeat’ 「敗北」に終わっても、「敗北」を ‘serenely borne’ 「こころ明るく耐えられる」ならば、‘Thy night [may be] a glorious morn’ 「おまえの夜は輝かしい朝となるだろう」と詩人は言う。詩の冒頭、詩人に喪失感を与えた一日の終わりである夕暮れと夜は、詩の最後において輝かしい朝への希望を抱かせてくれた。

ブリュッセル留学を体験したあとに完成された中期の詩、H155 ‘Self-Interrogation’ 「自問」においては、<死>は立ち向かうべき敵として存在していた。この時点において、まだ詩人の目にはH155第3連の言葉、‘the door of Death’ の向こうに何があるかは見えていない。このの

ち、彼女の〈死〉に対する観念は円熟の境に達する。自己の信念を貫くエミリが、〈死〉の世界にいかなる信仰をもって希望を見出すのか、それについては次章で述べる。

Ⅲ. エミリ・ブロンテの後期の詩に見られる〈死〉の観念

ブリュッセルから帰国後の1843年以降の作品を後期の詩として扱いたい。H170 ‘A Day Dream’ 「白昼夢」、H183 ‘Death’ 「死」、H191 ‘No Coward Soul Is Mine’ 「わたしの魂は怯懦ではない」といった傑作はみな後期に属する。エミリ25歳から27歳の頃に書かれたこれらの詩に共通しているのは、〈死〉を単純に終わりとは捉えていないことである。この頃のエミリは、〈死〉に対して絶望や悲しみとは違う感慨を、言い換えれば、ある信念を抱いているように思われる。

本章では、H177をとりあげ、エミリが〈死〉に対して抱いている信念を考察する。H177 ‘I.M. To I.G.’ 「I・M I・Gによせて」は、1844年11月6日エミリ26歳の作である。この詩は、ゴンドル詩に含まれ、I・GとI・Mはともに、ゴンドル物語の登場人物であろうと察せられる。詩の内容は父と娘の対話から成る。娘の名はアイアーニ (Iernë) だが、父親の名は不明である。‘Faith and Despondency’ 「信仰と失望」という題がつけられたこともあった⁽²⁶⁾。

詩の第1連冒頭、父親は ‘The winter wind is loud and wild; / Come close to me, my darling child!’⁽²⁷⁾ 「冬の風は音高く荒々しい／わたしのそばにおいで、愛しいわが子よ！」と言って、自分の娘をそばに呼ぶ。季節は冬。風が強い。続く第1連4行目に時刻は ‘the night’ 「夜」であることが示される。詳しく言うなら、第2連2行目に ‘November’s blasts’ とあるように、激しい疾風が吹く11月の夜である。第1連1・2行目の [w] [l] [k] そして [m]、折り重なるように続けられた音の効果が、冬の荒野に吹き荒れる風を表象しているかのようである。

この詩の第1連から第3連までは、場面設定を表している。父娘がいる場所 ‘our sheltered hall’ 「わたしたちの隠れ住む館」は、まるで小説『嵐が丘』の舞台、世の騒がしさから隔てられた環境にあるヒースクリフ (Heathcliff) の住居「嵐が丘」^{フザリング・ハイツ}を彷彿とさせる。雪に囲まれ、外界と隔てられた館の中で、父と娘は寄り添い合い、語らいの時間を過ごす。第3連には、近くに来た娘がおどけた眼差しで父親を見守り、父の胸に頬を寄せる様子が描かれる。外は冷たい風が吹き荒れているが、館の中は静かである。ふたりは暖炉のそばに在るであろうことが、第4連3行目の ‘in the red fire’s cheerful glow’ 「赤い暖炉の火の心地よい輝きのなかで」という語句からも想像できる。この状況は、『嵐が丘』第5章、風の強い10月のある晩、炉辺の椅子に腰かけて幼いキャスリンの髪に指を触れながら息を引きとるアーンショウ氏 (Mr. Earnshaw) の姿とイメージが重なる。第4連からは父親の述懐が始まる。タイトルの方 ‘Despondency’ を象徴する父親は、次のように失望の念を娘に話し出す。第5連を引用する。

“I dream of moor, and misty hill,
Where evening gathers, dark and chill,
For, lone, among the mountains cold
Lie those that I have loved of old,
And my heart aches, in speechless pain,
Exhausted with repinings vain,
That I shall see them ne'er again!”⁽²⁸⁾

父親は、荒野と霧深い丘を夢想し、「寒々とした山奥にさびしく／昔わたしの愛した人々が横たわる」ことに思いを馳せ、「もう二度と彼らには会えない」という失望に胸痛ませていることを娘に語る。＜死＞は永の別れ、心痛むもの、それが父親の＜死＞に対する考えである。

第6連から第11連までは、父親の嘆きに対する娘の言葉である。第6連の冒頭で娘は、自分もまた幼い頃 ‘Such thoughts’ 「そうした思い」、第5連で父親が訴えた「むなしい嘆き」「口にはいえない苦痛」に胸ふさがれたのだと言う。しかし、彼女は失望だけに留まらない。娘は第6連12・13行目で ‘But this world’s life has much to dread: / Not so, my father, with the Dead’⁽²⁹⁾ 「けれどこの世の暮らしには恐ろしいものがいっぱいあるのです／そして、お父さま、死んだ人にはそういうことはありません」と言い切る。これは＜死＞に対する考えを述べた重要な詩行である。娘は、この世の生活にこそ恐ろしいものがたくさんあり、この世は苦悩に満ちた世界だと考えている。1844年9月3日に書かれたH174 ‘To Imagination’ 「想像力によせて」の中で詩人は、外なる世界は欺瞞や憎悪、疑惑に満ちているとし、それらが生じない内なる世界をこそ尊んでいた。想像力と自分の心と自由とが主権をもつ内なる世界を尊ぶエミリは、この世の外なる世界に希望を見ることができない。だが、そのような失望はこの世から離れた死者にはないのだ。H177の詩における娘の言葉こそ、詩人エミリ自身の考えと一致すると思われる。第7連1行目から4行目は次のようである。

“O not for them should we despair;
The grave is drear, but they are not there:
Their dust is mingled with the sod;
Their happy souls are gone to God!”⁽³⁰⁾

娘は、わたしたち人間は死者たちのために絶望するべきではないと主張する。彼女は＜死＞に絶望の念を抱くのは間違いだと信じているのである。旧約聖書『創世記』第2章7節に ‘And the LORD God formed man of the dust of the ground, and breathed into his nostrils the breath of life’⁽³¹⁾ 「主なる神は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた」と

あるように、‘dust’「塵」から創られた肉体をもつ人間は、死ねば体は土と混ざり、魂は神の御許に行く。だから嘆く理由などないではありませんかと、娘は父親を慰める。タイトルの‘Faith’「信仰」を表象する娘は、ここではきわめてキリスト教的な考えを提示する。さらに、娘が胸に抱く信仰は独創的な思想を展開していく。娘は、死者たちと二度と会えないなどという悲しみは ‘to mourn the seed which grew / Unnoticed on its parent tree’⁽³²⁾ 「誰にも気づかれず親木の上に／生長する種子を嘆く」のと同じほどに無益であると言う。娘は自然界の植物の姿から、大切な教えを学ぶ。

“Because it fell in fertile earth
And sprang up to a glorious birth—
Struck deep its roots, and lifted high
Its green boughs in the breezy sky!”⁽³³⁾

なぜ〈死〉を悲しむことが無益なのか、その理由が第9連に示されている。死ねば肉体は土に還るということが第7連で主張されたが、土に還ることが何を意味するのか、種子を喩えにして娘は語る。第9連1行目の‘it’ = ‘the seed’「種子」は、「肥沃な土に落ち／芽を出し、輝かしい誕生をする」。新たな命は、「土深くその根を張り」空高く緑の枝を持ち上げる。大地は「輝かしい誕生」と根深いところで繋がっている。〈死〉が還る場所は土である。土は‘birth’「誕生」を育む場所である。〈死〉と「誕生」すなわち〈生〉は結びついている。〈生〉の行き着く場所が〈死〉であることは、考える輩である人間ならば誰でも知っている。しかし、〈死〉から〈生〉を見出す発想は、エミリ・ブロンテの特徴を表す一つの観念であるといえよう。これと共通する考えが、H183 ‘Death’「死」にも見られる。

H183の最後、第8連3・4行目には、〈死〉に対するエミリの考えが凝縮されている。

... its [spray’s] mouldering corpse will nourish
That from which it sprung—Eternity.’⁽³⁴⁾

「枝の朽ちゆく屍」つまり枯れ枝、〈死〉の存在が「枝が芽吹くところを養い育ててくれる」。枝が芽吹くところとは命が生まれる場所であり、そこがすなわち‘Eternity’「永遠」であると、詩人は歌う。エミリは、〈死〉によって〈生〉の源である〈永遠〉が育てられるのだと信じている。

H177の娘の言葉に戻る。このように〈死〉と〈生〉を固く結びつけて考える娘は、第10連1・2行目で ‘But I’ll not fear—I will not weep / For those whose bodies lie asleep’⁽³⁵⁾ 「わたしは恐れませんが——肉体が眠って横たわる／人々のために涙を流したりはいたしません」と断言している。

第11連の重要な2行、1・2行目を引用する。

“Where we were born—where you and I
Shall meet our dearest, when we die;”⁽³⁶⁾

繰り返される [w] の音は、<生>の循環とめぐり会いの輪を象徴しているかのようである。人はみな「死んだとき、最愛の人にめぐり会う」。その邂逅が果たされる場所こそ「わたしたちの生まれたところ」だと娘は言う。<死>はわたしたちが生まれ出てきた<生>の始まる場所であり、この世の‘From suffering and corruption free’「苦悩と腐敗から解き放たれた」聖なる国なのだから、恐れる必要はない。この娘の克己的な返答には、エミリ自身の思想が投影されている。

詩の最終連は、娘の考えに賛同する父親の言葉で閉じられる。第12連最後の6行を引用する。

And coming tempests, raging wild,
Shall strengthen thy desire—
Thy fervent hope, through storm and foam,
Through wind and Ocean’s roar,
To reach, at last, the eternal home—
The steadfast, changeless, shore!”⁽³⁷⁾

「おまえの願い」、「おまえの熱い望み」は、来る嵐によって強められ、大海原の哮りを越え、つまり現世の苦しみを耐え抜き、最後には「不動不変の岸辺」、<永遠>に到達するだろう。父親のこの結論は、H188やH191とも一致する考えである。H188の最終連で詩人は、<死>の世界に求める‘Hope’「希望」に対して‘Glad comforter’「楽しき慰め手よ」と呼びかけ、‘The more unjust seems present fate / The more my Spirit springs elate / Strong in thy strength, to anticipate / Rewarding Destiny!’⁽³⁸⁾「現世の運命が不当と思われれば思われるほど／それだけわたしの魂は意気揚々と躍り／おまえの力によって強くなり／報いのある運命を期待するのだ」と宣言する。また、晩年の傑作H191の第4連においても、自分自身を‘... one / Holding so fast by thy infinity / So surely anchored on / The steadfast rock of Immortality’⁽³⁹⁾「あなたの無限性にしっかり取りすがり／不滅性の不動の岩へ／このように確実に錨をおろした者」と表現している。

H177 ‘Faith and Despondency’「信仰と失望」は父と娘の会話という架空の物語の登場人物に託された対話詩であるが、やはりここにもエミリの内的葛藤が示されていたのであろう。H177の時点では、すでに<死>の世界は、悲しみや敵としての対象ではなく、希望や望みを詩

人に抱かせる聖なる場所となっている。そこは、前述のH41で詩人が嘆いていた移り変わりの激しい ‘earthly cares’ 「この世の煩い」といったものから隔てられた、‘steadfast’ 「不動」 ‘changeless’ 「不変」で ‘eternal’ 「とこしえなる」ふるさとである。後期の詩において、エミリの〈死〉の観念は確立され、彼女に確固たる信念に支えられた勇気を与えているのである。

結論

以上見てきたように、〈死〉は、エミリ・ブロンテにとって初期から晩年に至るまでの重要なテーマであった。10年あまりという短い詩作期間であるが、詩を書くことは、エミリにとって自我との対話であり、内面の表出であり、自己を克己の人へと導く原動力となっていた。

初期の詩としてとりあげたH41において、語り手は永別に際する心構えを示し、〈死〉をこの世の煩いからの解放と受け止め、〈永遠〉の時の流れの中では〈生〉がつかの間であることを知り、人は〈死〉によって天上の神の御許に行くのだというキリスト教的な望みを抱いていた。

そして、中期の詩H155においては、〈死〉は安らぎであり休息であるが、自分は〈死〉を求めて満足なのか、それとも〈生〉の世界に留まりたいのかという自問があった。詩人はこれに対して、何も為さないうちに休息を求めてはならず、〈死〉を敵として直視するべきであるという答えを導き出した。

最後に、後期の詩として扱ったH177は、二人の登場人物の会話に託してのやりとりである。〈死〉は永の別れ、悲しみであるという認識を提示し、じつはそうではないのだと逆説的に論を展開する。死ねば肉体は土に還るという事実から、詩人は〈死〉と〈生〉の循環を結びつけて考え、〈死〉を単なる悲嘆の対象として見るのではなく、〈死〉は〈生〉が生まれ出で、〈生〉を育む場所なのだという大きな希望を見出した。

牧師の娘であるエミリ・ブロンテが、キリスト教の教えにまったく無関係であったとは考えられない。当然、初期においては影響を受けていた。しかし、生来、思索を好む哲学的な性質である彼女は、従順にキリスト教の神を信じるのみに留まらない。彼女の思索の中で、〈死〉はときに安らぎであり、ときに抗うべき敵である。彼女は、自分自身で〈死〉という観念的な存在の真の姿を模索する。その過程における一つの鍵は、自然界である。枯れては芽吹き生死を繰り返す草木の、〈死〉と〈生〉の循環を見つめる中で、彼女は〈死〉が〈生〉を育むという、斬新な観念を培っていったのである。その後、エミリの思索の旅はH191で ‘God within my breast’⁽⁴⁰⁾ 「わが胸のうちの神」を確立していくまで、たゆむことなく進められていく。

思索は、彼女の思想を深め、彼女の精神を高める。〈死〉は絶望だけを人間に与えるのではない。報いのある希望をつねに内包している。このように彼女の思想は、人間全体へと通じる

真理に向かって広がっていく。エミリ・ブロンテの詩は、われわれに ‘the door of Death’ の向こうの希望の存在を、気づかせてくれるのである。

【注】

- (1) 藤木直子「エミリ・ブロンテと故郷の自然」(エミリ・ブロンテ(藤木直子訳)『エミリ・ブロンテ全詩集』(大阪教育図書, 1998) pp. 385-386.
- (2) 藤木直子「エミリ・ブロンテ小伝」(前掲書) p. V.
- (3) ジル・ディックス・グナツシア(中岡洋、芦澤久江訳)『エミリ・ブロンテ 神への叛逆』(彩流社, 2003) p. 60.
- (4) エミリ・ブロンテ(中岡洋訳)『エミリ・ジェイン・ブロンテ全詩集』(国文社, 1993) p. 429.
- (5) Emily Brontë, *The Complete Poems of Emily Jane Brontë*. C.W. Hatfield (ed.), (New York: Columbia University Press, 1995) p. 59. 詩の日本語訳は、中岡洋訳『エミリ・ジェイン・ブロンテ全詩集』(国文社, 1993) を使わせていただいた。
- (6) *ibid.*, p. 205.
- (7) *ibid.*, p. 232.
- (8) *ibid.*, pp. 59-60.
- (9) *ibid.*, p. 60.
- (10) *Loc. cit.*
- (11) 中岡洋「ブリュッセル」(中岡洋、内田能嗣編著『ブロンテ文学のふるさと—写真による文学鑑賞—』第八部)(大阪教育図書, 1999) p. 139.
- (12) 『エミリ・ブロンテ 神への叛逆』 p. 215.
- (13) 前掲書 p. 271.
- (14) 『エミリ・ジェイン・ブロンテ全詩集』 p. 445.
- (15) *The Complete Poems of Emily Jane Brontë*, p. 179.
- (16) *Loc. cit.*
- (17) *Loc. cit.*
- (18) *ibid.*, p. 232.
- (19) *ibid.*, p. 180.
- (20) *Loc. cit.*
- (21) アト・ド・フリース(山下圭一郎ほか訳)『イメージ・シンボル事典』(大修館書店, 1984) p. 387.
- (22) フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』 22 Sep. 2005
<<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9C%88%E6%A1%82%E6%A8%B9>>
- (23) *The Complete Poems of Emily Jane Brontë*, p. 180.
- (24) *ibid.*, p. 163.
- (25) *ibid.*, p. 180.

- (26) エミリ・ブロンテ (中岡洋訳) 『エミリ・ジェイン・ブロンテ全詩集』(国文社, 1993) p. 449.
エミリ・ブロンテ (藤木直子訳) 『エミリ・ブロンテ全詩集』(大阪教育図書, 1998) p. 379.
- (27) *The Complete Poems of Emily Jane Brontë*, p. 209.
- (28) *ibid.*, p. 210.
- (29) *Loc. cit.*
- (30) *ibid.*, pp. 210-211.
- (31) *The Holy Bible: King James Version*. (Philadelphia: National Publishing Company, 1978) Genesis 2:7. 日本語訳は、日本聖書協会の口語訳聖書による。旧約聖書『創世記』
- (32) *The Complete Poems of Emily Jane Brontë*, p. 211.
- (33) *Loc. cit.*
- (34) *ibid.*, p. 225.
- (35) *ibid.*, p. 211.
- (36) *Loc. cit.*
- (37) *Loc. cit.*
- (38) *ibid.*, p. 233.
- (39) *ibid.*, p. 243.
- (40) *Loc. cit.*

(うしろなか ようこ 文学研究科英米文学専攻博士後期課程)

(指導：古我 正和 教授)

2005年10月19日受理